



抄本三浦草子
 一、方人言原
 二、人言原
 三、人言原
 四、人言原
 五、人言原
 六、人言原
 七、人言原
 八、人言原
 九、人言原
 十、人言原
 十一、人言原
 十二、人言原
 十三、人言原
 十四、人言原
 十五、人言原
 十六、人言原
 十七、人言原
 十八、人言原
 十九、人言原
 二十、人言原
 二十一、人言原
 二十二、人言原
 二十三、人言原
 二十四、人言原
 二十五、人言原
 二十六、人言原
 二十七、人言原
 二十八、人言原
 二十九、人言原
 三十、人言原
 三十一、人言原
 三十二、人言原
 三十三、人言原
 三十四、人言原
 三十五、人言原
 三十六、人言原
 三十七、人言原
 三十八、人言原
 三十九、人言原
 四十、人言原
 四十一、人言原
 四十二、人言原
 四十三、人言原
 四十四、人言原
 四十五、人言原
 四十六、人言原
 四十七、人言原
 四十八、人言原
 四十九、人言原
 五十、人言原
 五十一、人言原
 五十二、人言原
 五十三、人言原
 五十四、人言原
 五十五、人言原
 五十六、人言原
 五十七、人言原
 五十八、人言原
 五十九、人言原
 六十、人言原
 六十一、人言原
 六十二、人言原
 六十三、人言原
 六十四、人言原
 六十五、人言原
 六十六、人言原
 六十七、人言原
 六十八、人言原
 六十九、人言原
 七十、人言原
 七十一、人言原
 七十二、人言原
 七十三、人言原
 七十四、人言原
 七十五、人言原
 七十六、人言原
 七十七、人言原
 七十八、人言原
 七十九、人言原
 八十、人言原
 八十一、人言原
 八十二、人言原
 八十三、人言原
 八十四、人言原
 八十五、人言原
 八十六、人言原
 八十七、人言原
 八十八、人言原
 八十九、人言原
 九十、人言原
 九十一、人言原
 九十二、人言原
 九十三、人言原
 九十四、人言原
 九十五、人言原
 九十六、人言原
 九十七、人言原
 九十八、人言原
 九十九、人言原
 一百、人言原

子
 子

清水濱
積字正濫要畧



臣藏書

あつらん人の日限あつとてつひりあつとてはあつらん
 のこころはあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらん
 にあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらん
 和歌とてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらん
 こころあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらん
 人のあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらん
 あつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらん
 書とてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらん
 人のあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらんあつとてはあつらん

かくてしるすれはるうて武ゆまなり新勅撰に同し

逢とよ今かきあはれいさむり末あつてしむる

ゆゑと混をわづしむるも有るなりまは古今の

世のうたのんぬらいつらんふと同しるさうと

江とい音使の書たふあつてんあるとも出な

信計王弘計王兄身そまはる億計王兄かぬも後

位よはせまひて仁賢天皇中弘計王顯宗天皇也古事記

意祁王袁祁王かまはり億意共又假名に弘袁共まかり

億大の義弘ふかふ計何の義といふ事いさるは

混をまのの中つまは清兄ははま西身といふは



黄口さ記をらて花の羣雀志を記わむにかり清首とみ

てららひきを衆替ゆふといふに明魏の先いひし

ふまにこそはまは近頃の人かたはははやくあは

真名の四声よまへといふあはれいふまは

國の共うと和語のといひて真名もかき音も

然の音あました神世は更すといふ人の世あつて

おのほはれいといふ其後文字よりて後和語

伊為寺は音ともつひといふまはまはれ記當を

大姉子の假名遠くとも遠保遠於とも於遠く

し思ふ過といふなりかきまは保のといふまは教

字に反しとて反に上と切字下と韻字と云ふは歎字を
平上入の字をねと和語と。附るは用か上は字をい
等とあつて汪切切し切保切烏切於切かといふ皆あいつを
の字之羊切夷切愈切庾切亦切余切與切欲切戈切餘切
は後らひやいひの字之王切為切掌切寸切雲切禹切羽切
あまはわわうゑ於於字これをとて古書の假名は隨う
は海は假名のあゝ海と得

松云源平盛衰記女納言信西双六目三三三三トイハ去宗揚貴妃下
双六ヲ撰玉ハ時コ目三三三三三三ト出タハ五位ヲ授ク五位ハ赤衣ナレハ大ヨリ
朱四朱三下云ル由ラ云リ今按此説智アル人偽リタシト云ル類テ法皇
思ハモ信西ニ尋サセ玉ハ廣文ノキコエアルケレハカスロニ不知トハイナヒカタク
造リコトニ云タルハ總テ双六重リタル目ノ同皆重ノ字ト傳語ナリ重ハ

或書の詞... 重三... 重四... 重五... 重六...
或書の詞... 重三... 重四... 重五... 重六...
目二一度より出ると重目と云
是ニテ音無窮ナルヲ知シ本宗ニヨリテ五音通シ假名ノ差ハルヲ一トモ
ナク音便ヲ宗トセリ

重韻會云儲用切原也冬韻博各切音ハ是同地名直籠切
陽韻叶傳玉切襪腫勻括骨切原也ナヨウ箋音直骨切
送句多貢切トウ

右似閑老人ノ書入也

或曰習三習四モ書也... 三人ノ目ヲ合スレハ六アリ雙六ノ下場ニ五ハ三三ノ石下ルトアタハカレハ
夕尾能天眼ヲ以テ三千界ヲ見世間首者モ五色明闇等ヲ開テ信スレハ智眼ニハ礙ナレ見テ
悉ク誤レルハ七百ノ見ナルニ劣レリ正理ヲ聞得スレテ却テ慢障ヲ高ク整ルハ智眼早ク盲タル
人ナリ真嶋モ金鉞ヲ投テ手ヲ拱ク處ナリ諺曰盲瞽不畏蛇ト街談巷説モ採ヘキコト
アリトハ蓋此事也

在滿云此文一本ニ全ク無
レテ別ノ文アリイッレモ
契沖ノ詞トハミユト本
書ニ拘ラズナリシモ此
處ニ附ヘキナラス
後明云コト在滿考非
或本ニ似閑老人ノ加筆
ナリトイハルヲヨシトス

引證書目

神珙九尋反紐圖 新勅撰 古今集 古事記

日本紀 倭名鈔 韻會 延喜式

萬葉集 六帖 玉篇 蒙求

千載集 長能家集 源氏物語 白氏文集

朗詠集 真字假名物語 字彙 舊唐紀

藥師寺佛足石贊歌 後撰集 三代實錄

後拾遺 金葉 姓氏錄 菅家萬葉

新古今 拾芥抄 類聚國史 仲文家集

忠見家集 兼盛家集 源中^仲正家集 兼輔家集

齋宮女御家集 中務家集 續日本紀

宇治大納言物語 行阿假名文字遺

本朝文粹 釋日本紀

令義解 左傳 公忠家集 重之家集

躬恒家集 土佐日記 夫木集 八雲御抄

袖中抄 敬木抄 續日本後紀 好忠家集

貫之家集 順家集 江次第 倭娘命世紀

藻塩草 一心戒文 續古今 沙石集

赤深衛門家集 日本後紀 古語拾遺

和字正濫要畧

和字正濫通妨抄

補改

第一卷序

以作威稜

日本紀云稜威正濫序作威稜自改也いつとりのり韻會漢書とて云

李廣傳云稜威李奇曰神靈之威曰稜嚴也宗といつとら

警余 第二卷

いんこれ大和國十市郡今云いんこれ後出していんれも

書云六詔よりいんれなりいんれといふは次延喜式書神

日本盤余彦天皇神武といんれと云うたふはあやまり

古事記云倭伊波礼妣古命自伊下五と云明證也

大遜盧子諒覽古詩曰
稜威章臺頭註曰稜
猶大馬○漢書武帝
報廣曰威稜檣于懸回

彌萬いん今云あ葉弟四家持強

いんこれと云ふも忘るる事と思ふは強といふも

今如おに申すに忘るる事と云ふは強といふも

いんこれと云ふも忘るる事と云ふは強といふも

の後のいんを略せり同類して通をいん

いんこれと云ふも忘るる事と云ふは強といふも

威稜いつ日本神代紀云稜威此云伊都注ありらに稜威書

標賢敬かうい今云倭名鈔に敬音雲玉篇所考切也敬

蹄躡つま馬和名牛病病あると馬といん

愛知あいら和名尾張郡名今云智と知と作しあいら詔也

作まは法

彈丸 さいり 今云和名彈弓唐韻曰彈弓 徒丹切去声 俗音暖宮 放丸弓

也文字集畧曰竹弦弓也玉篇彈の下玉珣上弓上同こあり

さいりとは蒙求の潘岳の下に照せるといふ也

さいりといふは さいり 意深く出たれ和名

と後わらぬ事とて誤り

船 ね 和名船 子船 反 字誤なり 船祖冬反音宗説文二船 着沙不行

木蓮子 いし 今云和名 和名 日本紀と誤て万葉と

とる是の中下れいの上日本紀和名と誤るは

饗饋 かた 今云饗と和名は饗と作る玉篇

饗飭同字也

初 うい 古今物名 音 物名 音 とおとさ

第三卷

覆 おほ 世が 音 重点 音 と 音 やうにふ

大 おほ 万葉大すと和名 音 和名 音

大 音 の 音 と 音

多 おほ 世 音 重点 音 と 音 書習へり

騰臭 と 今云和名 音 騰臭 音 同字也

響 おほ 日本 音 神代卷下云喧響此云濔等 音 此

襪衫 おほ の 音 直衣 音 今云和名 音 直衣 音 誤り 音

と 音 の 音 俗 音 直衣 音 と 音 也

随分白氏文集つて

又集

今云随分管絃遺還自是此随分と流布の文

集又乃ちあつて照し古き朗詠の照す方ありと息と真名伊

賀物語ああふくゆいさへわさへきたりたささやき

くくくくくくくくくくく随分と用所假名のアルナ

まういナキトはいはれりとのナキマるく流布市の白

氏文集三字もたまひるれ今如前帖よはき此ひ

よ入してりいあふあわくぬい化さ随分如字くけ

いと夢ゆりあつていもあつても話るる

落

あつて世字の彙なるる三浦さハ十三画下と尋らる

今忘あつてり十二画下下有魚放反音路香草云々

膽

い和名類聚鈔第三云黄子云膽

都敢反和名伊

為中精所

梅精嵩作正

同弟和名久未方伊二十又參

世俗は德膽の諸病は通して上未ある

やうにいへば人參ハ神草と名付るはどの未あるは德膽は

比して和名と付るは化はあつても伊の字と用は膽

の假名いかに説き日本記第三神武紀夫和のいこま山と膽

駒山といひ景行代は近江のりき山と膽吹のよ垂仁天皇

乃自妻膽香足姫命と古事紀は伊香帶日子命といふ

姫と日子との異説也要閑紀は底武藏校出部百和名と考ふ

豊前因京都郡下毛郡シモモノノヘ諫山あり世山といふのらるる任人

るく諫いし世修名よあへんとやりて一毎明紀膽振
サハヒス胆蝦夷自註膽振胆世云伊浮利波倍イカリカ倍有又天武純
膽香瓦臣イカカある氏伊杵也和名山陸奥國の郡名膽澤と
伊佐波註といふは胆振修名いふは伊佐波と和名
用詞よわねとありて胆世とも有す胆の修名と
為んといふに執て能膽ともいふのわづか胆助
膽吹もわづかといふは胆世といふは胆助といふ
ありちん伊勢伊吹も去ふといはれりわづかといふは
よあへといふは胆世といふは胆助といふは

瑞籙いふ和名云美豆加改一云以賢改力業弟十は伊垣俗

書よわづかといふは丹の家名なりはる垣也といふ神代
よあへといふは文字よりて後の名なりなりとていふは
因幡いふ和名よ以余ハ註と舊事本記弟十は稲葉國古更
紀上は稻羽といふは行平卿立りいふはといふにつけて
よあへといふは胆世といふは胆助といふは
入く丑畿七道次第を載るは但馬の下石見の上より因幡
國の名所なる事明なりは外古は往者といふは
おほく修名なりは胆世といふは胆助といふは
僻素といふは胆世といふは胆助といふは
といふは胆世といふは胆助といふは

有り故又全わんよのほに安能伊能脂能遠能と
ひきあくとていふ事と決と

引佐いさる遠江郡名和名伊奈佐万葉字十四も伊奈佐保曾江
中にあつて源と玉音扁と余忍以振二切もよんわんあ
ら次以余止切もよんわんはよけての因もよん同
假名もよん同いあいうの伊引ハやいもえよのい
あり

印南野いさる和名播磨国印南郡と伊奈史と注と景行
天皇紀は縮日萬葉六印南縮日縮見不欲見野將行又

假名よ伊奈史とよん中又縮日とよんわんいさる
同韻通をうま後も又俗とよ印の字又けてわんよん
わんよん日本紀と御間城入彦五十瓊殖天皇崇神天
皇は御名よんよん事紀と御真木入日古印惠命と
て印惠二字以音と注と又日本紀と垂仁天皇の皇子五十瓊
敷入彦命とよん古史紀と印色と入日子命とわん印色
二字以音と注と五十の訓いさる故よんわんよん一と代と
五十日太とよん既と伊又切とて事よんわんよん你疑と疑と
わんよん外も印の字と用とわんよん出とて注と

物作りのしと錯ふることの彼名もよきしやと迷ふこと
と初字の違ひとて入りてやとよきものとかくとるは
和語の邪魔とて和作よりよきものといふはあつた
かき人の幸と武城は住言偃と共束して此者
へきよかて雑の刀と揮く牛と刺してはくかられり戯の
口と揮て愁の眉と頻算めたり

忌部いじへ和名河波国麻殖^子惠郡^{の郡}名也伊無倍^{注に}はる
誰も志して彼名をよと彼俗をよといひ云河今業わい
書しるし故よの彼名と別れとよとわと別れ
いふ名といひわいふれとがよと推量する有彼

とやより音訓もいふぬ人をよと為とやいふよの
いふよかち千偽切をれわわわとてやのいふわ
と知れんしとてよまらるる河邊をわわまらるる
物といひらやよまらるるれゆは通ふわとわん
へと云云成へて為と和名属はたよとれ堅凍春刻
抵疑とてよ清ふ事かち

中下のい

棹かい和名加萬葉予二と奥津加伊又邊津加伊同十に賀伊
のららと和作のたにのよと用とるゆれり洗いと
當麻たいよ和名多以未履中紀よ當麻徑同帝は清かに吹掃

麻知古事紀マダコシキの當岐麻道津タマキマミチツの當藝麻知タマキマダチとあり垂
仁紀タマキの當里麻タマキまた同類とあるはしるにのみまことたいてし
いふいふも同類相通也當の字ハ万葉ナク山城國相樂郡
布當宮フタタミヤ又布當野フタタノともあり又第ナハあゝあゝの所と
當都タマツともあり今も此と出たは俗云よとえまといわ
して上字音名しと云元訓はは声の受へこゝる當麻
二字の音もて名きて和訓はわすこ心持る所山道と迷る
る人者タマキハ和漢の意ハ知る所たまきまといふとた
まき通タマキしてしるゝとありん之真名とかりて刺るも
播磨國幡守のタマキ又た元平といふハ誤なり

築塙 ついにち 和名は豆以此知ついにちといふ同類も通

てしよいらの生形といひらるゝといふことつらのものといふ
こもいふ同類事又諭と和名は豆以此知伊大といふ俗
牌板タマキといふ物之俗といひらるゝと名してついにちのいひら
らるゝ俗云流池と云流之風雅の心ありん人ハ地の子と母と
俗なる事といへし是も執りてものありぬと出た
老 たい萬葉集第十九の意伊豆久安我未此といふ老執我身也
和名は遠江國長下郡老馬オウマ又老繫オウケツ又日本紀間人連
老自註オウジは老此オウ云云詠ありしれやゆはあゝいひ此
假名内オウに於いと執りて俗書よりて出た

行署 ほろ 外居

雞栖 こしお 和名鳥居也

宿直 このお

乞兒 かゑお 和名加多井

地震 なわ 武烈紀御製那為我ナガヨリ里ヨリ處ヨハ魔

髮髪 うかお 和名宇奈為ウナ百葉ヒヤク十六同

莞 たわお 為葉葉十四於保為具佐 和名於保井

大炊寮 おほわつら 和名於保為乃豆加佐

烏芋 くまお 和名久和井

詣 まわて 由ゆてこもまわりた云百葉十八葉為泥

一こも又木為之ろせと又朝參又十二三麻為氏きま

と又素師守仏足石讚歌よのおらとたつりとりて記

人のいまふま和礼毛麻胃底牟出也らまわての泥をりま

てわわのりまて通とり

紫陽花 あらしお百葉第四第二十の味狭藍能名六廿二

要安治佐為和名よ安豆佐為こて草類入り

用 とらお

い附

標 いらい和名標子比以和允恭紀到倭春日食標井上古

夏紀中卷孝照天皇段上壹比五年臣上上の標井と氏

之同春應神天皇の御方より伊知比事能和迹佐能
途衣云櫛舟の和珥挾野土とあり用明紀云赤禱比云伊知
比馬百葉十食者神より伊知比以上皆ソラハシク
いらわさるる俗書もこれに執るるは明證と云
蓬菓ソラハシ雄略紀云蓬菓此云伊致寐姑とソラハシ別種
ソラハシモノト云

械ソハ和名比後撰云池水のソハ出さるるソラハシカク言
出さるるをソハハシ果紀云ソハハシハシモノト
ソラハシ俗云ソハハシト執るるはソハハシノ事ナレ
ハナリト云

飯

ソハ俗書ソハハシト云武烈紀云物部影媛ノ歌
拖摩護係播伊比佐倍母理日本紀百葉飼飯神社ニルニ延
喜式ニ云比神社七陣ノ事紀同播磨國郡名揖保と和名
伊比保三代實録云延喜式ニハ粒ノ一字よりてらりあつ但
和名同郡と云揖保郷有伊比奉と云ハシ而ヤナ天照大神
社ニソハ神ノモノト云郷の名記よりて同和名又餐饋饋ノ加
太加之木乃以此強飯と云ハ伊比油飯油阿不良以此糲糲保之以此
餉餉と加礼比於久留俗云加礼比餅と云知比餅と久佐毛記比糲
ハ毛知乃与祿祿と云ハ毛知比の与祿ハハシクハハシ糲飯
と云ソハハシの略云文武紀云三ノ阿提飯高年漏阿提と云

小らしき世はらさしと書依書しるれと辨にぬ

訖と申てわきふ初る内堅知此佐信濃國郡名小縣知此佐

禪知此佐小婿知此佐石衣知此佐山知此佐の流知此佐

よ先賢とりしうに

甥知此佐和名平比阿姪知此佐俗云とていしうに

いしうにいしうに甲女のしら有りしとていしうに

いしうにいしうに何うとていしうにいしうに

子為離孫男每高古平比いしうに金葉集又甲斐のいしうに

いしうにいしうにいしうにいしうにいしうに

人のいしうにいしうにいしうにいしうに

のいしうにいしうにいしうにいしうに

いしうにいしうにいしうにいしうに

檀日宮かゝいのも真名仲哀紀かゝいのも

訶志比宮万葉の香推しと和名は加須地江と姓氏録

よ糟氷三代實録の香襲かゝいのも香推し江と

おとけぬ俗云いしうにいしうにいしうに

檀日かゝいのも糟氷かゝいのもいしうに

貝かゝいのも俗云いしうにいしうにいしうに

ふしかゝいのもいしうにいしうにいしうに

虫皮甲也又文蛤 保加 比 蛭 比 貽 比 魁蛤 比 紫貝 比

保加 比 貝贄 比 古事紀云其後田是古神坐阿邪訶時為漢切

於比良丈貝 自比至 又比音 其牛見咋合而沉溺海鹽云比良丈貝

いひく上三字と音の目ハ神代よりいひくまゝのまゝに

こころ同下巻よるつこのわいゆのくぬぬ岐賀比よこ茶

天皇の皇女交通王より下り世所又文字わたりていふ久

いひ万葉集下巻和漢礼儀比又いひつこも可比といふ

又いひとれ我比同十八なるこのうらふも可比の同歩

可比よあつせ菅家百葉よりの春もゆへ貝那之和名

大和國添下郡鳥貝 比 後撰よせの海のりいりの濱いふ

こも今ハ何てふい昔も新古今に垣のまよふも捕

得たりと今我めいひぬこかいのあるはよとを漢

字探るゆへ又和名又即記これとたふいふいふて自今

又和名電貝體の部ニ文字集果各云亀蚌之屬甲曰介 甲音 俗云

不かいといふて今之音なりといふ亀の甲と貝といふ

よわいといふに僻字といひて古賢もいふく

宵といひても俗云よわい書へていふゆゑに沈むる

くゆると之允恭純又衣通姫のゆゑにいつせこも

いふよのりのからひ虚詭比志るても葉集下西よは

比破利又ゆわけも詩余比又六帖のなにいひふから

魂

いしつらふるの花のいしつらふあひてしる紫陽は
四葉咲くはしつらふの能名なるはしつらふしつらふ
たましい万葉集のしつらふは多麻之比并三つりのお心神
又情神とたましいと名しつらふ事おたふし又修多書で
訖掇とたましい身及ひる中しつらふしつらふ鬼と多麻之
のこしつらふ比并しつらふ魂のたましいと霊のたましいの
多とたましいしつらふと上略して世しつらふ又魂のたましい
いとたましいしつらふ神皇産灵神御魂としつらふ高皇産
霊と高御魂としつらふ皇産此云美武須毗と神代紀
自註わしつらふ産霊と産栖日としつらふ奇のたましいこのたましい

鯛

しつらふ又しつらふしつらふしつらふ世国よ日とらやしつらふ
き事のはつらふしつらふ奇日方とら事と者しつらふ奇日と上界
してしつらふは魂の神妙の物なれとらまた俗とまたは
しつらふかしつらふしつらふしつらふ世とらたはつらふは世に
よわと用とら事又よとねと證あるとらしてしつらふは
たいしつらふ世とらたはつらふ人自俗とらしつらふしつらふ
しつらふは世とら事とらしつらふ初とら大北荒夷とら延喜式とら
平魚とらかしつらふとらゆらしつらふらめとら魚とら大北良の畧とら
拾芥抄とら宮時祭文とらゆらしつらふ新舊とらしつらふとらしつらふ
鯛の平らとら鯛の珍魚とらしつらふとらしつらふとらしつらふとら

平如常年を物すもいふにさしつて事たはびらる物よんふ
常ある如く平とすもたゞいふに人古世理なり上神代紀
在平礼と注して陀毗羅とあり百系中十七暮庭亦敷
美多此良氣受同少多比良氣久あやひよふぬ類聚國
史藤原右大臣園人嵯峨天皇の自天宮南池行傳
しやふと奉りしやふらふの目れ池のほとりやとまに
多比良波らふとちくまきつや竹しひくふ今の都平安
城以上平魚のひくはるまで鯛の修名の説とすひや
六帖よあふとていひの語をいひのたいさるは人
もさうかひいふもたいさるめよなひくさうははるく

へと料よ上ふさく俗子ゆふのものゆもさるぬ
かかふいふさうに心のはぬぬあふ今據ととて

曾許比

曾許比世といひさしうこわらふ俗去執と故よ
出はる百系中千五あめばら曾許比能字良介あ
うとく君といふ人さるぬりうといひ限の意を
退部といふ通とさういひあつていふとわらう
このうといひさる底よとてりといひ底もやい
いのみ界をさつくる

遂

はひよせよはわらふと俗去もいふと執と古事記中卷
武内宿禰のなま那賀美古夜都毗途斯良系登加理波吉

年良新新系并女須惠都比尔

愁

かろしいは万葉集四卷太麻強のひたり生強の意をよみ
古事紀亦稍取依其御琴而ナク邦麻邦ナク麻述控坐ナクあつハ
あつハの意は俗よあつハのよも通して笑ゆを頼
會愁疑僅切亦雅強也詩不愁遺一先註心不欲自能強
之辞和語の心ナクよかか入り

鵲

杙

くしい和名よ久久比一云古布
くしい和名よ久比ナク杙之比字都應神紀よ委愚比ナク免
區古事紀よ韋具比ナク知わくしい楳杙ナクてわせきの前より
つ杙ナク又古事紀よ許母理久能波都誓能賀多矣都誓尔伊

久比表字知新毛都誓尔麻久比表字知伊久比余波加賀
美表加気麻久比余波麻多麻表加気ナク々世余戸系并
十三よハ伊杙真杙ナクのけを世ナクくしい上のおくしいあつハ
能名と云伊ハナク詞を只くしいつあをりハ後かとの
叶の事よ忌抗ナクこつハ略抗ナク杙ナク杙ナク又用ナクハ非ナクるナクり
和名よナクり

株

水雞

くしい和名よ久比世古事紀倭建尊の沛分トアマニサ六斗トアマニサ麻述佐
和多流久毗比ナクよナクせまナクりナクあつハ俗よあつハのあつハナクり
水雞くしい和名よ久比余皇極天皇紀水雞此ナク云俱比那仲
文家集よ云院の大ゆめナクらナクつナクひナクらナクやナクぬナクくナクたナクと

書りし俗書よりれと執りぬる見ありしをせ
志らばといふこと流し行へん人心あへ

強

強志して万葉第三天皇賜志斐姬御哥強流志斐能
我強語御返し志斐伊波奏強語登言これ志斐入ふ
氏とてあうとせり菅家万葉評午少い
春のそりれ又評午のれんこも万葉第九巻
四臂而有八羽同第十八麻迫我弊里之尔底あま
とらふ三首評の字の能名也評として強は能強
とて怒りけり三川かふ志ひちる事あふ
強とてわご俗に語る由きてあ辨へ能の

額

いたむ和名比太比又敬髪比方飛比方の女の髪けりあ
あはれぬの名又石籠菊比方又戴皇馬比方又細幸
比本乃比比太比又佐比太比比等能名の流なりけりわと去人有俗去しこと
りこいふよりて又よたたり

ひ

ひあわとい世能名すたぬる流し又真名ありて
志らば齊宮女御集りしよあはれけりひあひ
云々又あひる社のあはれ河は紅糸ある前て又中務
集り中宮のひあわといのすまはは
ひあわのあまのあはれあはれもけりあはれ
ゆといはるやんを帰るも又まはれいあんのあ御

續按釋日本紀七四
比奈遊 又江次第
十七比奈とみ

中宮より七つうらまひのあはれをわけてまてあ
あまうして世にまわりのみまことの世もたよこと
あま俗に仮名に記さるるれはあれ一國は皆
いなきも又いなきもあまの俗に記さるる
去真名に離の字に書り見負は音に記さるる音便
よしいといふこといふの音便にいふこといふこと
假名に記さるること鳥のひるを記さるること
見及の記に記さるることあまの記に記さるること
していなきもいふことあまの記に記さるること
あま俗に記さるることあまの記に記さるること

初^初い真名に日本紀^{物位}い^初あまの記に記さるること
古今集物をまじりてい^初あまの記に記さるること
あまの記に記さるることあまの記に記さるること
日本紀又本居に記さるることあまの記に記さるること
あまの記に記さるることあまの記に記さるること
あまの記に記さるることあまの記に記さるること
あまの記に記さるることあまの記に記さるること
あまの記に記さるることあまの記に記さるること

一のさしいとく... 能名とて... 母之母
この人の... 世首ハ他の中首ナリ
... 世首ハ他の中首ナリ
... 世首ハ他の中首ナリ

黄芩ヒラキ和名北比良木各戦天夜麻比世芭戦天ハ

草部ヒラキ黄芩の下ニ名芭戦天ニあれは

らも同物也... 木も通す...

記上比々良木又中ニ給比々良木之八寸予續日本紀ニ

大寶二年造官職獻杠谷樹長八尋俗云比々良木第四十

七ノ左右兵衛の... 杖の中ニ比々良木三束...

い... 或ハいわゆる... 明證...

住... 一万余年緒長久住居名座之物相同...

い... 周麻比都... 住居...

書... 能名... 杖の中ニ比々良木三束...

よ...

相撲す... 和名須未比遊仙宮屈又推の家...

よ... 和名須未比遊仙宮屈又推の家...

よ... 和名須未比遊仙宮屈又推の家...

よ... 和名須未比遊仙宮屈又推の家...

よ... 和名須未比遊仙宮屈又推の家...

尾

岑又岑又丘又尾音 五葉身十四日花ハハハツツハハ

いしつ平能倍比外只尾尾上トシテの字同しハハ

世もこの字ハハ俗書も桃ハハ

ふは祖ハハ出は真名ハハ萬葉ハハ

字ハハ月ハハくハハ下の尾ハハ

雄ハハ男ハハれハハ世ハハもハハ

上ハハ雄ハハ誥ハハ比ハハ鳥ハハ多ハハ

紀ハハ須ハハ佐ハハ之ハハ男ハハ命ハハ

和ハハ名ハハ又ハハ次ハハ下ハハのハハ

尾ハハ世ハハ世ハハ尾ハハのハハ

世ハハ泉ハハ尾ハハ張ハハいハハ

名ハハ鳥ハハ歎ハハ尻ハハ長ハハ

日本ハハ武ハハ尊ハハ比ハハ

表ハハ波ハハ理ハハ拾ハハ遺ハハ

水ハハのハハ

武紀ハハ雄ハハ水ハハ門ハハ和ハハ名ハハ

和名ハハ又ハハ次ハハ下ハハのハハ

尾ハハ世ハハ世ハハ尾ハハのハハ

世ハハ泉ハハ尾ハハ張ハハいハハ

名ハハ鳥ハハ歎ハハ尻ハハ長ハハ

日本ハハ武ハハ尊ハハ比ハハ

表ハハ波ハハ理ハハ拾ハハ遺ハハ

水ハハのハハ

今本於百首八語也

平波^里利又伊勢桑名郡尾津郡遠江敷知郡尾間^里萬甲

斐八代郡沼尾^{乃平}近江高嶋郡三尾^美信濃水内郡

郷名又尾張^{利倍}備前邑久郡尾沼^平同郡尾張^利

讚岐奥川郡長尾^{奈賀}鶉足郡長尾^{奈品}伊豫和氣郡

高尾^多雄畧紀又吉備尾代哥又み^ちにわ^ちや鳴之

盧能古道より尾代子と武曾と自称と之万葉

第十四又山々の平呂能波都平尔かこかけ尾の末尾

あり呂ハ助語之本朝大粹第一前中書王の莫求表賦又

云吾將入龜緒之巖隈目註龜緒使龜山也猶如龜尾

也之讀之故云又万葉第十六又退^{ソト}莫^マ立^タ禁^キ尾^ビ亦^ト又

うらひさ宮の尾見名なるのき無の節尾又春より七

野邊尾のくれ又秋去く山邊尾ゆを又うたら路尾

るよ又さら尾思ひ厚尾もたしていしらもく之第十

七のよの川水緒とんとあれ常よ水尾おく而之第

八又十尾予方よわひよの夜都平の流き又あはれこ三け

き平乃倍平又尾花と口葉平八又平花葛花第十五字花

我下之恩草又麻花押靡置而路命又平花之末平秋の

いん第十五又波都平花ア厚よあきて平花又平波

奈布岐の流流風又く平波あしをまんじこ

類聚国史第三十又平群朝臣賀是麻呂歌又い

波藥師寺仏足石贊歌和我子波平与則平又已乃興波
 平開年新古今又南無あまははけのそよひりあ
 いりりももね心ももあられらのむらねむはきそ
 いりりねり但糸の緒とははけりる心もむ世能るの沈しん
 少男ラトコいこ神代紀又少男ラトコ世鳥等孤女此云鳥等呼こ
 このも射もりとしりるれしんいここちりる理りんを
 世又語るあの子と云るれ俗云又是と執しりていり
 沈しんと門あつめゆきし彼名と知りありん古史記
 玄訓壯史云遠表等古ラトコあ葉弟五よりんらこの遠ラトコ口古
 佐備とも同ラトコ四又伊射西平騰許ラトコ月平人年登枯病月

十九よ知智平登店同ラトコ又平登古平美奈能波奈又
 安豆麻平等故称徳紀ラトコのふよ平止賣良介平止古多智
 蘓比和名又又平平止前支之太平云云
 折とい俗書よ只折ラトコの所いなる平折ラトコのちいりるこちこい
 臆説也用もまたら折ラトコもねしよよは直ラトコもしりて
 平上玄の三声りりても皆も用てしよも月ラトコのち
 百葉平也梅のち平余首ある平世河もほかといよ
 こいりりめい平利都々たのしきとい又あといやラトコのち
 近とい遠理可射ラトコ又人とい平理加射之し又梅の花平利
 てつせも流人又うめの花多平利ラトコりて又くりに

平利志うの所を又うの志平理の... 又十七布
佐多平理の類衆國史の嵯峨天皇の訪よ...
平城天皇の御せりし御方よ... 人のその香よ...
く御まの於保母能多平利太流祚布... 表利比度
能うのたゆちく御宇倍... けいりりり可
兼よ杉敷... 次... へ

并し釋日本紀第五云公望私記曰問云凡如此傳語皆為耶
由乎答曰於理論之必可有其由也假令謂行爲乎即無等之
類皆是可有所以也言是乎礼也無也其可折屈身體而
具聞也雅古紀馬子大臣の秋の鳥呂鐵跡氏鬼伽倍摩

桶

都羅武^{ツラム}... といひて... といひて

といけ 和名よ平討行阿の假名遣又桶の... 阿の假
名はけし桶の... といけ... 行阿の意は雅
をいひて... 分りて平声... といひて
去声... といひて... 上声... といひて
して假名遣... 桶の... 去声... といひて
去声... といひて... 今... 昔の假名遣...
用蔓青のあはれ... 音便... 假名遣
介... 七... 各平... 三... 四... 十... 百...

若千房（イ）といひつ小いいたる九十四字ありし若いぬに
いふこれのしよ（イ）重とさるるも各ニ字有て合く十二字
首（イ）之候令（イ）つ（イ）ま（イ）い（イ）く色ハ平声色好ハ上声色々
ま（イ）あ（イ）う（イ）ま（イ）り（イ）く（イ）御（イ）あ（イ）ハ平声御（イ）ハ上声御（イ）中（イ）ハ上声
字（イ）とた（イ）の（イ）こ（イ）ろ（イ）あ（イ）ら（イ）い（イ）た（イ）の（イ）こ（イ）い（イ）わ（イ）ゆ（イ）を（イ）わ（イ）ろ
い（イ）と（イ）ろ（イ）又（イ）ま（イ）と（イ）に（イ）る（イ）ま（イ）と（イ）て（イ）分（イ）之（イ）行（イ）阿（イ）の（イ）誤（イ）根（イ）を（イ）わ（イ）て
今（イ）に（イ）わ（イ）け（イ）と（イ）野（イ）謂（イ）二（イ）首（イ）の（イ）衆（イ）首（イ）と（イ）ら（イ）ひ（イ）く（イ）桶（イ）と（イ）け（イ）と（イ）麻
首（イ）と（イ）似（イ）方（イ）より（イ）名（イ）月（イ）初（イ）と（イ）今（イ）は（イ）俗（イ）め（イ）と（イ）け（イ）た（イ）め（イ）と（イ）け（イ）と（イ）い
く（イ）苦（イ）と（イ）う（イ）ら（イ）ゆ（イ）め（イ）ら（イ）今（イ）は（イ）解（イ）と（イ）女（イ）神（イ）と（イ）ら（イ）麻（イ）首（イ）と（イ）水
桶（イ）と（イ）ち（イ）も（イ）了（イ）り（イ）延（イ）喜（イ）式（イ）款（イ）十（イ）六（イ）内（イ）藏（イ）式（イ）云（イ）水（イ）甄（イ）麻（イ）首（イ）三（イ）口（イ）水（イ）麻

醉

筍吾杓十五柄同廿九内膳式云越後（イ）鮮（イ）見（イ）水（イ）頭（イ）及（イ）膳（イ）
酒式云造酒雜器水麻筍二十口小麻筍二十口萬葉序十三口
不（イ）習（イ）い（イ）と（イ）の（イ）ら（イ）麻（イ）筍（イ）と（イ）た（イ）ま（イ）し（イ）と（イ）ら（イ）と（イ）を（イ）長（イ）門（イ）の（イ）ら（イ）に（イ）は（イ）又（イ）乱
麻（イ）の（イ）麻（イ）筍（イ）と（イ）あ（イ）ら（イ）同（イ）十四（イ）と（イ）あ（イ）ら（イ）と（イ）を（イ）遠（イ）家（イ）余（イ）と（イ）ゆ（イ）小
う（イ）酒（イ）も（イ）之（イ）ら（イ）今（イ）ま（イ）ら（イ）麻（イ）筍（イ）と（イ）桶（イ）と（イ）用（イ）式（イ）と（イ）桶（イ）と（イ）麻（イ）筍（イ）と（イ）用（イ）と（イ）れ
麻（イ）筍（イ）と（イ）桶（イ）と（イ）名（イ）と（イ）く（イ）真（イ）と（イ）通（イ）り（イ）と（イ）り（イ）と（イ）百（イ）葉（イ）と（イ）遠（イ）家
和（イ）名（イ）と（イ）字（イ）討（イ）延（イ）喜（イ）式（イ）と（イ）小（イ）麻（イ）筍（イ）と（イ）か（イ）ら（イ）何（イ）と（イ）ら（イ）て（イ）お（イ）け（イ）と（イ）け
こ（イ）介（イ）へ（イ）き（イ）妙（イ）樂（イ）大（イ）師（イ）云（イ）依（イ）憑（イ）説（イ）莫（イ）信（イ）傳（イ）和（イ）語（イ）と（イ）た（イ）ら（イ）し（イ）の（イ）
人（イ）の（イ）ま（イ）ら（イ）と（イ）流（イ）し（イ）て（イ）お（イ）し（イ）と（イ）ら（イ）て（イ）末（イ）字（イ）の（イ）體（イ）説（イ）と（イ）用（イ）へ（イ）た

箴
いさし 和名字佐

通事

譯語

和名駿河國有度郡郷名他田あり平佐多
註に大和國城上郡も同名の郷有りと譯語田といふ
として駿河の平佐多と流して通事譯語といふ

候名とたし

長

里長舟長河長

驛長

平佐多

治

平佐多

不賢と稱し日本紀又不肖不敏不敏等といふ

水うとよとほふつりつり都の年のいふらん

重之家集よとつる春のふといふらん

よとつるらん公忠のつら稚の宗とつるらん

治

平佐多流中

又比奈平佐米爾とつるらん

治部省 平佐多 修理職 平佐多 叔納の宗とつるらん

の字は候名とつるらん

瀧按新撰字鏡ニ載
於度呂とあり 斐沖
法師のころより
いまもそのまら
うにみよ末の奇
とをいふなり

是音杉んたるぬよ和名法陽寮の岐名於午夜寧乃豆如佐
こわく世異音ありぬよ南くことより人神於貫衆 於通和 更北

音

續断於行 夜更 燐火於北 是の音は用ていふこととて
音は世にみよこととて去るなり俗にみよんく批るなり
證拠もいふに神代紀下噴響言は云遊等カトナヒ 娜比百葉并五
うらひよの於登企久るなり又於登不きてめいふことえん同
十四よ安能於登世受ゆんことよりぬのよは是の ちりま
とて於登もいふ也又カカア ちりの於登たり同サぬのちりの
於登もいふ又うらまじりりらの於登もいふ同サぬのちりの
く於登もいふなり同サぬのちりの於登もいふなりぬのちりの

棘

ねらる 後成御およ春日跡のいふらぬ道のいふ水末末
神の志すいふを彼末の為遠御末いふこといひ誤るは
日野いふらるなり神よのいふ驚ることいふこと用はく
志くこといふこと證るなり

弟

ねらる 和名於止宇止山城國郡名也訓於登 止宇止と初
ハ瀧國といひることと傳して弟國といひること又いふは
いひこといふこといふこと又説るなり乳母 女 於止 姉 婦 於止 女
神代紀下照媛姫 哥小 登多奈波多古事紀ハ遊登多那 波
多是ハ親の愛もいふこといふこといふこといふこと
いふこといふこと俗説すこといふこといふこと

字鏡 惛 於曾留

遲

神尊

波平 平久武

於太比爾伊麻佐布倍志登

にそ〜万葉の鈍の字も同く〜於曾留

〜れと心方〜同九於曾也於曾留

同十四於曾留波夜も〜於曾留

〜於曾留又於曾波也母き〜

〜於曾留俗云〜

〜於曾留

恐にそ〜於曾留

襲た〜日本紀於曾留瀨於瀨於曾留御襲於曾留

古事記於曾留美於瀨比又意瀨比於曾留

字鏡 忙 怕 於豆

押日於曾留〜於曾留

〜於曾留

惛

お川於曾留藥師寺於曾留足石於曾留賀歌於曾留伊加豆於曾留知乃於曾留比加利於曾留乃於曾留期止於曾留夜於曾留已於曾留祀

乃於曾留微波於曾留志於曾留雨於曾留乃於曾留於保於曾留收於曾留美都於曾留禰於曾留介於曾留多於曾留具於曾留霸於曾留朝於曾留利

〜於曾留不考得

媼

たじか於曾留和名於曾留於無於曾留念於曾留は於曾留自於曾留の於曾留女於曾留い於曾留と於曾留な於曾留も於曾留と於曾留ん於曾留あ於曾留ら於曾留り

〜於曾留

〜於曾留

〜於曾留

陰陽師於曾留行於曾留〜於曾留和名於曾留陰陽於曾留寮於曾留於於曾留年於曾留夜於曾留宇於曾留乃於曾留豆於曾留加於曾留佐於曾留陰於曾留於於曾留今

濱海尾間字の一葉
一本よりかきよき
上文尾を比島上遠江
教習郡尾間并と川
りて今本於万とある
誤り一考考ありけり
今の印本は於万とあり
後の字誤り故に
さきこを考の字誤り
うら傷あり

尾間

追

證とらるる月ハ流
およ 遠江教習郡

月ヒクハモノハ

少いさうも同すあは流たれ為氏まみよひつ又流たれ
氏とれい記にもねり同十七よもふ流たれ奴つこれの
こと又流たれ多流あしやるもき文并四よもつ河れ
忠君所贈哉しよしよれは傍の修名こわひ又通して
同十七鷹のふに於敷とよゆともねり鳥と追ふ
よこつたれ之和名又馳射乃以流追物射と月ハ流
凡河内りやつら和名丹波国加佐郡御名凡海と流布之
安萬河内国と加不知注とねり流と又日本記にん

濱海くものやまひ
といのそは十一
ては中よきとあり
くものやまひとあり
古今集に思ひあり
まうてありけり
こはハハ十一
てあり

大もつりり河内国と大河内国と先代萬葉本紀
第十檀原朝御世以彦己留保理命為凡河内国造
あり日本紀の中は此氏の入香賜味張矢張糖乎と人
ふへり神代紀は素戔嗚尊五柱男神となくをさ
中の弟三天津彦根命こり伊神世本祖あり又世大河
内と流たれいねりあらしふ氏といひつとあり
かこり事あらしねへ大の字を用ふも心とあり
行からし日本紀第十先恭絶又衣通姫のふまのり
ふひとまは區茂能於虚奈比と有と流たれ
遺いこと遠仙窟又遺の字といふことあり又やゆか

りありし物の名は王の字馬の字なりと付く呼如曾
こひしり短かきしひまの終りうへる曾終り云々曾半こ
有へり旅と用をる念知りしとて徳国の声よふよ
てて重れりやれん凡たの家下はなせいとてうか
にゆき善西女のおとけは世におあつてみのおもこ
ちまひしと略ししとて下よあつて下よあつて別れ
懐香くれのおも 和や久礼乃旅も古今物やゆふくれのおも
んげよのこしとてうか

中下はは 所におよぶとて

五百福山いやは山集集りよとらつてを愛あつてをわめく

いふらふ山といひ古事記は雄略天皇の御かよ那加
須岐母伊本知母賀母といひ長き錦と五百千もろく
五百千とあり百も十はあつては伊保知し我かれ
も同じ之の國とて朝攜尔伊保都登里多底とて
五百津島とて駿河の廬原と五百原と古事記は
いふらふ事子了借廬と借五百のこつては廬と
五百入のこつては百の百のやわはらつては
しとてはあつては知りしとてやとてはあつては
字を屋へしとて人あつてはとては

憤 いまの日本紀は武内宿禰の字は異根廻信呂之茂百

しき越の國之世よとてしき又挑とて人も古の
古語と出と

大^{日本}紀とほりり神代紀と大小之魚とこぼりくし^い
といふと點と万葉集十三の河登保之呂之弟十七も
いふくくもり俗と遠白とてり

丁とんり日本紀の訓之和名と近江國淺井郡^{御名}丁野の飯名
與保乃これららの略と

とほりつ田よとて鹿島なとてちりちり拾遺書
よふ山田と人よとて我かたなとてほつと身とて
云ふと始と秋の田とたぬらりも君とて神のうにけり

あつぬ日なとてる落と物あつぬとてほつと云ふ能存
いふのつとあつ武烈紀と物部影媛と哥と備岐曾鹿
選と有せつとつとつとつとつとつとつとつとつと

猶

弟十はあつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
又系保之ぬとつと又系保とつとつとつとつとつと
今日も大新嘗乃猶^{良比}能^能豊明^能開行日^能在^能る^能ほら^能ひ^能道
會^能と^能く^能猶^能良^能比^能の^能備^能と^能つ^能れ^能り^能と^能直^能と^能つ^能と^能云^能ふ^能合^能と^能て
説^能と^能す^能へ^能

直相なほらし續日本後紀第一云天長十年冬十月癸未朔
辛丑為大嘗會將修禊事行幸賀茂河禊事畢
御直相喔之扈從從五位已上天皇鑿馬延喜式第三
十二大膳式上云神熊直相俗云直禊之ハ誤ハ誤ハ誤ハ
号壽也ハ和語の相ハ倭名也ハ暹ハ暹ハ暹ハ

直ハかほく質ハととあはれハととあはれハととあはれハ
ととあはれハととあはれハととあはれハととあはれハ
弟十四下合保那保尔ハととあはれハととあはれハ
石武藏国足立郡御名稻直ハ保ハ又ハ欄ハ不ハ古ハ呂ハ毛ハ
直衣ハととあはれハととあはれハととあはれハととあはれハ
近江國甲賀郡御名山直也味豊後國御名
保又欄不古呂毛
直衣

かしくハととあはれハととあはれハととあはれハととあはれハ

枉ハととあはれハ神功皇后のゆハかハととあはれハ玖流保之古車記玖流本

斯ハととあはれハととあはれハととあはれハととあはれハ

蜻蛉ハこほろハととあはれハ和名ハ古保呂木

競ハきほろハととあはれハととあはれハととあはれハととあはれハ

藝保布ハととあはれハととあはれハととあはれハととあはれハ

江

纒ハ江ハ和名ハ於盈切俗云燕尾

烏帽子ハえほハととあはれハ和名ハ俗訛烏為馬ハえほハととあはれハととあはれハ

髭ハととあはれハととあはれハととあはれハととあはれハととあはれハ

濱島ハ鳥帽子ハわわ
うをの道語ハを
うをの道語ハを
うをの道語ハを
あり考ハあり考ハ

うかーとんーとよまきのあつねいへも五音の字
なれいへほりしと云なりし

夷 えう新古今頼朝卿のあみらのくのいそそ思ふえ
うあつねいへほりしと云のあつねいへ陸奥よりえう
とんきて名前とやうしつげくおれいあつねい
よえうあつねいとそそ思ふの流しと云

撰 えうぬ曾孫好忠家集は源順のきのえとそそ思ふれ
えういへいりてとよみいへいと我意のえうあつねい
流れしとよと能く

筵道 えんとう

夜 えやと 和名よ衣夜美まゝと糖も和名同

蝦夷 えいし 神武純のあゝ愛瀬詩のいりえいしと云

このの同韻五音とて通せり和名よ地榆と衣比須祢
芍薬と衣比須久須里決明と衣比須久佐昆布と衣
比須女とつり惠美酒とかくは能名たたり

中下の江

嘶 いとえ 和名よ以波由とありあつねいへいへい
とふとまへと五音同韻とも通とそそ思ふ以奈と久
ともいり馬の初よいの声と出とてあつねいへい
あつねいへ馬の初よいの声と出とてあつねいへい
あつねいへ馬の初よいの声と出とてあつねいへい

あきこいしあきとく又さうあけりて年々皆はゆかるとは
ほと通とていふえいしあえのい記

花宴 く好のえい 宴 於見切

競 ほえ 和名又波江早比ゆりれとくち通江

英 くえ 顯宗紀云英此云波中百葉をいふ川藻とていふ

波由流同十四やあさしりきれい伴要須礼

吠 ほえ 和名又保由江通とていふ丸のりゆえ

藪 ひこえ 和名此古波衣

鷓 わえ 和名又浪江古事記云妖要百葉やうふ奴要子鳥

こころりや五葉十も有

轅 ちうえ 和名又奈加江長柄のちえ

笛 あえ 和名又布江繼體紀云府吏

あえ あ葉弟八 百枝刺於布流橋玉尔貫五目平近美

安奴我尔花咲尔家里弟十又水草花の阿要奴解虫弟

十八橋あも安由流貫波多麻尔奴伎都追こころり俗も

血とわやとこころ壺の字和名又即徳反訓安不云阿倍毛

乃樽薑蒜以醋和之こあま薑蒜と樽合とぬ者にあまの

こころ又和の字と見しれささそりれ壺の字に准と安

布留とて安田留こころりも但河布留こ安由留こ曰

韻とて通く阿部毛乃阿要毛乃同韻とて通とれり河え

このまゝに記すに、
あはれなることあり又十九も春花のふたふた
ふたふたに上りて、
准うふへしとて、

小月物あえとの日本紀中十應神天皇紀は、
あはれなることあり又十九も春花のふたふた
俗に云ふやうりのこと、
故よとて、

榮 けえとれ又うえあやと、

俗に云ふやうりのこと、
伊夜佐加波延、
上河姫の、
喜式并八祝詞の中、
わんふとて、

才 けえ左の音と、
百萬月十子左殿と、

とんこしと曰大橋のちよ春のれ孫枝毛伊はのあ
ふととんつて又通るま同く又和名は條の巨に珍と
比伊こあふりゆり音ははるい伊はれあつえ
いの中のを通るやゆはよの中を呼入るあはらは
よはくはつねと五音の通ふとつらつらのゆく

榮螺子 和名は佐左江

鶉 ^鴨 和名は比衣力葉子十二比要

飛簷 ^鴨 和名は比衣土里

道遠 ^鴨 和名は比衣無

道遠 ^鴨 志遠即道 習習即道

楚 了んえ 和名は魚條の下に更條讀 須波 夜利 本朝式は楚割

此和割の意須波和利なるとははりりこはひいよらよ
所は和の夜を同讀して通了んえはひいよらよはまてと
くやつとこいふ魚といふはのよらくはよ更條の割と
とんこし

餌 五和名は惠同又屠兒 惠止利 注屠牛馬肉取鷹鳥鷄餌之義

也云日本紀河内国志紀郡餌香といふ取あらしの衛我も
惠我もあらしの順家集よ末といふも二首の上下に
あらしよあらしの香をいふより五首よりあらしよ君
とんこしあらしの香をいふは早くもいふは恵といふは

しつとつてへん

平安あふ、和名又阿惠加波路国津名郡郷名之源氏物語

あふたに云河あり假名曰くく

赤卒ありて和名又阿加惠無波赤くらしは蜻蛉胡梨

木惠無波黄あり蜻蛉也

故ゆゑ古史記中巻又應神天皇の伊分所申す由惠日本紀

并十四羅畧紀のちみ喻衛をあらわす大舟のゆゑにわん

人の兒由惠亦同十四又わん六由惠をけりて又てくぬ

り兒由惠亦又ぬかへ十四由惠亦又をたたりもぬ

兒由惠亦同十五又わん由惠亦のびるやせう又わん由惠亦

妹がりくらし又わん由惠よりいひぬ又ぬわぬ
和礼由惠亦くく落してゆゑと云ふ

居るゑ萬を承りてなまらぬのち三輪須惠同十四

いしてあめのみも利敬須惠十七又伊波比倍須惠都日十九

よこららゆひ須惠てり我が本真白部のた又やうの由

しらのこを屋戸亦須惠同サ又わん船平宇気須

惠又ありてはぬも宇気次惠和名又陶須惠也居物作のさ

礎以之須惠家集又あしとちり又ぬく二百としてよぬ中の

あしとちりぬくちよの餌のあしとちり其てのち早く

よとちり有又續古今集に後鳥羽院の内分は

と申す所の系とほけけのり神武紀は遷秩極卒赤膚居稚
と申すふと云は流之とてと申すあこちよのいふねか

中下のへ

家

二和名は伊弉丹百部千五の伊弉那良婆此外島葉和名は
其流多しこれたせも申れよと念と云人ちよりいも大
つらふ之にづく故よあは出ぬ

蠅

はへ和名は波剛

穰

と云和名は波剛岐今たつと云と云是紀

芭苴はへ神武紀は珥倍和名は於保逆倍と申す姓は和名は

伊計邇倍生贄のそと

にへもあや十四よもなほのるく入を爾倍とてなるか

しきと云ふそちもこれの田のあはれとてそとてたてて
田とてたふ可やとてらうとて今もそといふつとて
あこちのそとて其見いぬ人のあてといふとてかして

あやと云ふはこころは真名は見及りぬ新食と云へ爾は
いひの略るくかみは流前国下座郡の郷名は秘峯長久波倍

是も名ははらぬかぬはぬかぬの男多し人といふ
く留といひく作りては人のこころは養鷹とて名はりたり
新嘗とていふはひとてのそとてはひといひはひといひ新敷とて
應とてとてや神代紀は時天推彦新嘗休卧之時也これ

人代はありて天子は新嘗會とてたてあまは同く
方 一 和名は加久乃山名は此の時皇母と用ふ倍昔
百葉もし高麗ぬらまの河東佐往てし倍とあり俗は加久
と云ふ倍とありや倍

梶 一 和名は加倍俗は加久と云

堪 一 たらたるともきり絶たえたるは修名とあり別あり

中ふふりりて河と

蹇 一 和名は那因久又阿之奈因左傳云充偽足漢説文云

蹇ハ行不正とありやうも行乞之足痛とあり人あり

誤りしそれハ修名となえん

筌 一 和名は字倍捕魚具

轉 一 和名は佐別都流

往方 一 此真名万葉あり同方五よ由ハ弊斯良禰漢菅

家名も濱子鳥往邊もかき俗はゆくと云ふ和名

中下のわ和名はありて言便ありてゆい和名

結菓 一 和名は加久乃阿和江次弟ハ加久繩古今集
の長哥よりありていふ和名は江次弟の意あり

くの阿とむ乃阿切奈なれははくしハ加久奈和と云ふ

和修名をく介沫の修名阿和れは阿修とありけり

へしとあり加久乃阿和の阿の字あり繩の意あり

あつとあり

5

漢書ほをえともうら
大なり倍下の味の修
をわくせよ

梳

たらしむ 万葉集に又予弱女の念多和兼乎こらし又
弟十^十又枝毛多和和^和こらしまたしむ又古史記に
和建余^毎以^毎清^毎分^毎煩^毎曾^毎多^毎和^毎夜^毎賀^毎比^毎那^毎遠^毎麻^毎迦^毎于^毎登^毎波^毎
よ^毎と^毎多^毎も^毎細^毎く^毎ゆ^毎と^毎や^毎ね^毎時^毎た^毎あ^毎う^毎た^毎ん^毎て^毎ら^毎し
り^毎と^毎骨^毎の^毎や^毎う^毎う^毎な^毎ら^毎い^毎ら^毎い^毎と^毎も^毎あ^毎つ^毎へ^毎こ^毎し^毎ぬ^毎り
あれ又同

浦田

うらた 和名又伊勢国郡名河曲^{加波}同国度會郡御名
箕曲^{美乃}和^和曲^和の^和字^和も^和同^和磯^和田^和隈^和田^和等^和も^和同^和之^和美^和葉^和弟^和
田^和浦^和箕^和こ^和ら^和し^和も^和箕^和の^和あ^和ら^和し^和れ^和ぬ^和あ^和れ^和う^和ら^和し^和ぬ^和
同^和ら^和し^和ら^和う^和と^和は^和ら^和う^和こ^和ら^和し^和ぬ^和同^和

靴

くつあし 和名又化の久都

鳥芽

くまね 和名又久和井

輿

こし 和名又豆和都良俗云久都和疾蒸街宇波良

具都和くつあしと新勅撰物名哥^街のくつあし
ろ田のこしけけ^街ら^街の^街久^街名^街た^街ら^街の^街鑣^街久^街都^街波^街美^街俗^街云^街久^街々^街美^街
一名勒馬口中鐵也輿ハ總と鑣ハ別なり今本朝から
こころハ總別混々もれ尋ねへ

理

いこころ 萬葉集に又けり許等^止和理^止弟^止十^止又^止ほ^止ま
の^止己^止等^止和^止利^止同^止十八^止又^止う^止つ^止せ^止の^止よ^止ら^止許^止等^止和^止利^止十九^止も
此^止二^止句^止あ^止り^止い^止こ^止ら^止し^止こ^止ら^止し^止ハ^止誤^止也^止
〜

居 正徳名未考但正徳名はわの下も通らる
正徳名(きんり)

中下のは こまきや中は俗まうぬれとあつと

朱櫻 正徳名波加一云途波佐久良一名櫻桃一名合

桃合俗まゆとら こまゆと別まゆとら

こまゆと 正徳名紀古史記延喜式等

加こま木名あり こまゆと

正徳海との河 こまゆと

雨波 こまゆと

十五も雨波 こまゆと

平坦 こまゆと

用 こまゆと

万葉 こまゆと

雨 こまゆと

片羽 こまゆと

首 こまゆと

て名 こまゆと

車 こまゆと

の片 こまゆと

輪 こまゆと

あ こまゆと

と こまゆと

と こまゆと

と こまゆと

と こまゆと

いものあつてうぶいものといふたはうぶいものといふたは
今一人うぶいものうぶいものといふたはうぶいものといふたは
いものあつてうぶいものといふたはうぶいものといふたは
輪はうぶいものうぶいものといふたはうぶいものといふたは
いものあつてうぶいものといふたはうぶいものといふたは
伊勢物浴衣のいものうぶいものといふたはうぶいものといふたは
物浴衣のいものうぶいものといふたはうぶいものといふたは

團扇 うらと 和名は宇智波

中下のう

僧 ほろりその日本紀より法師の二音と和名は月

より法ハ入声して其音と法性法燈と云所なり法
しよふらとていふ理なりと和名も去昔審のよ
保字之萬良比止乃豆加佐とあり玄番僧と蕃客
といはるる官定と外保布之今といふものといふ
といはるる記ありや法の号音皆に准と云
十日 とうり景行紀の連なりハ昔鳩伽と云古事紀の
登遠如首れ帝のる記と云普通としてとうりといふ
赤津衛門家集よりひらきして尾法といふ所あり
都よりとていふとていふとていふとていふとていふと
いふにいふとていふとていふとていふとていふと

尾法 尾法の温なり

急居つらう宗神紀云此免改字自注わん流つおまに河
陵苔のせう和名は農世字世のくもんくうくまはなう又

の和名未加夜木

意字なり 和名は放字と注と出雲國郡名之万葉字也

出雲守門部王のあゝ飲字の海の塩字のこの行いひ

やむんたのなそと定家卿とてとてはひまうき

あめこの海は注字のこのはひまうきとてはひまうき

ちもあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

うりあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

いなるいなるいなるいなるいなるいなるいなるいなる

とまのあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

とまの注字云右門部王任出雲守時聚部内娘字也云

萬葉の正本よりいかにいかに此程よりいかにいかに

して修名よりいかにいかにいかにいかにいかにいかに

集字云出雲守門部王思京師哥の飲海のかりの

らららあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

らららあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

とて注字はあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

又大君はあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

甲ふ 和名又俗音古不 加布多 古不 加布多 古不

却ふ 和名又俗音古不

業ぶ 和名又俗音古不

鵠ふ 和名古布一名父比

障泥あふ 和名又阿不利

諾 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子

紀 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子

倍 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子

漢倭和子し字倍の傳あり深江輔仁本和名多し一く都子字倍とあり和名おのひハ字を年とて轉して一ハ馬を無方と書しを猶あふきとされと都子ハ全く輔仁の本和を引れし字なる(コトを)の述さるる後人の年とて写誤れり(コト)ハ新撰万葉と都子とを字倍の傳あり(コト)ハ

平城天皇の御あふと人の心のまたしらくも字倍

荊 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子

和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子

馬 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子

青驪馬 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子 菅原 和名又都子

駸馬布知馬衣無麻刷于麻波馬蝟無玉鑿腸草于末本

日本紀第十四雄略各紀の初は宇麻同サニ推古天皇の御方

は八宇麻麻字イ在羅羅麻麻字イ百五第ナ四又宇麻具多是ハ上総國

馬來田之郡の名之今の望陀なり又波由馬宇馬夜又比呂

波之宇宇馬古思我祢氏同十八は宇萬麻字イ雨布都麻雨小

波は太馬ふさうやうり宇麻古非許婆同又宇麻

夜奈流以上うまこりり同卷訪人長秋は宇麻能都未

少れの時よとけとてしよとけつとてと通と

へき心れち東かむれ別あ紀

梅うめ 和名宇女百葉茅也又蘇持の父大納言旅人御太宰

仰るり河家に三十二文集云て梅のちとて追

加のちもろ又世首成イ鳥梅のかけりこれやと梅の異音

と轉して能名又用より世阿比音とて字よけて梅の

あつと河のやると楊奈疑こりり又月一其外は宇米

汗米梅有米十梅ふとけり年梅こころを分一首何也

實木異字イは宇梅と功也は他又例するも思ふて弟八第十序

ナセよりサヤととも思ふれはゆりた古今集物

名ようめと類とてあつとけりも思ふて

らひりり香はほひつ順家集も西四葉宮源

中納言のりしとてうもとてとて梅津川に

伊弉波万葉歌の八全
その題より年を
年と詠れり
万葉七巻の

はつらうかなるこゝろに
かたじけなく
まよひ近れり
こゝろ人か
いし

筵

いしらの
稲庭河
音便

優婆塞

うぼく
音便
優婆塞

棄

うす
流有未能波奈

生

うぶ
神功皇后

紀云生譽田天皇
古事紀云生成國土

可美

うみ
神代絶云可美

埋木

うづめ
埋清

木
音便
万葉集

わさどらしと麻笥よふもくしと上麻受登毛と

元禄十一戊寅五月初八日 浪華 契冲速作

寛永四年五月上旬一校畢

一本は奥書なり

世書ハ密系沙門契冲速作也往昔著
和字正濫抄五卷しり古書と訂證して
奇道の便と志多武江の住橋成貞こ
ころ人知字通例去ハ卷とけりて新古
比彼名と師へ正濫と誂誘とるり也
何れよとるも師古書ふり書へき旨と世
書ふ具よのあひ正濫も流去し給りまこと
處多古人のりしめきさる彼名とるりみ
より俗よとるしとるり車世とるり
んしとるり

于時寶永己丑正月於六波羅密寺
邊一校畢

洛東隱士似閑

寶曆五^{乙亥}冬十二月冬至日
校合畢

田上藤原朝臣光豐



享和二壬戌歲得羽倉在滿本校讐了

溪生



